

愛知登文会・文化財紹介

【2014年総会・茶話会】



- ・名古屋テレビ塔（名古屋市）
- ・尾関家住宅（犬山市）
- ・旧湊屋店舗兼主屋・土蔵（一宮市）
- ・実相寺 方丈・庫裡（西尾市）
- ・知多岡田簡易郵便局舎（知多市）
- ・名古屋陶磁器会館（名古屋市）
- ・小栗家住宅（半田市）
- ・博物館明治村 西園寺公望別邸「坐漁荘」（犬山市）
- ・大野宿鳳来館（新城市）
- ・柴田家住宅主屋（清須市）
- ・岡崎信用金庫資料館（岡崎市）
- ・笥家住宅（名古屋市）
- ・小島家住宅「忍冬酒本舗 残月の間特別公開」（犬山市）

本冊子は愛知登文会 2014年総会・茶話会において紹介されたものをベースに所有者の方にとりまとめていただいたものです。

名古屋テレビ塔

所在地：名古屋市中区錦3-6-15 先
所有者：名古屋テレビ塔株式会社
建築年：昭和29（1954）年
登録年：平成17（2005）年

日本初のテレビ用集約電波塔として誕生

名古屋の戦災復興では2本の100m道路の整備が打ち出されたが、その際に都心のシンボルとして位置づけられたのが名古屋テレビ塔の建設である。日本でテレビジョン放送が開始されることを機会として全国に先駆けた東洋の「エッフェル塔」を建設しようとするもので、官民一体となった一大プロジェクトとして、着工からわずか9ヶ月の昭和29(1954)6月に日本初の集約電波塔が建設された。

設計は早稲田大学の内藤多仲博士。博士はこの後、札幌テレビ塔、東京タワー、通天閣、別府テレビ塔、博多タワーなど次々に手がけ、「塔博士」ともよばれた。名古屋テレビ塔は日本のタワーの魁で有り、その後のタワー建設に大きな影響を与えた。



建設当時のテレビ塔

放送タワーの役割を終え新たな出発

平成23(2011)年7月にアナログ放送が終了し、アナログ放送の電波塔としての役割を終えた。3階のテレビ局の送信機室、2階の電気室は不要となり、その跡の有効活用が課題となっている。また、耐震改修の必要性も指摘されているが、その費用捻出が課題となっている。

平成26(2014)年6月でテレビ塔は60周年を迎えることになり、ライトアップを一新した。100周年を目指して、テレビ塔だけではなく栄や久屋大通公園の再開発の中でテレビ塔が今後の役割をどう担うかの検討を始めている。



新しいライトアップ(ローリングシンチレーション)

尾関家住宅

所在地：犬山市白山平 2
所有者：個人
建築年：天保 14（1843）年頃
登録年：平成 11（1999）年

母屋と土蔵が登録文化財

犬山市で犬山焼という陶器を、作っています。
築 170 年の母屋と土蔵が登録文化財となり、西側の座敷の柱が濃尾震災で裂けているのをボルトで絞めて使用しています。



犬山焼

犬山焼は華やかな雲錦手（紅葉と桜の柄）や赤絵の上絵付（焼成した素地の上に絵を描き焼き付けた物）が特徴です。

天保 13 年犬山丸山に御用瓦窯として創業し、慶応 2 年より藩に願い出て製陶業を始めました。瓦は戦後に廃業し、今は陶器製造販売をしています。



こども文化財体験

平成 26 年の 3 月に奥村先生にご協力いただき、建物の説明や陶器の上絵付けの体験をこども文化財体験講座で使っていただきました。



旧湊屋店舗兼主屋・土蔵

所在地：一宮市起字堤町 33-1
所有者：個人
建築年：店舗兼主屋 明治前期/昭和 34 年改修
土蔵 江戸末期・昭和前期/昭和中期移築増築
登録年：平成 22 (2010) 年

湊屋主屋全景

北西方向より全景を臨む。
連子格子の右端が玄関。



玄関及び湊屋営業内容

上：玄関を正面に見る。
左下：茶屋・湊屋で提供の昼食、木曾川産アユ他、
地産のものを使用。
右下：木曾川水運を利用していた湊屋に因み、流
域産品を店内で販売。



室内風景

茶屋の営業風景を、玄関より見る。



中庭

座敷より中庭を臨む。
少し見づらいが、写真左下は石の手洗鉢。その下
に流れ落ちる水を水琴窟で受ける。



実相寺 方丈・庫裡

所在地：西尾市上町下屋敷 15
所有者：実相寺
建築年：江戸初期・前期
登録年：平成 15(2003)年

境内中央に釈迦堂を望む

文永 8 年（1271）に創建された実相寺は京都東福寺の開山聖一國師を招請して開かれた寺であり、釈迦三尊像、梵鐘、釈迦堂等、数多くの文化財が残されています。



実相寺門前より境内の眺望

国登録文化財の実相寺方丈

吉良氏の祖、足利満氏により創建された実相寺は、七堂伽藍が整い、周りには四十余りの塔頭寺院が散在する大寺院でしたが、永禄 4 年織田信長により、諸堂すべてを焼失しました。慶長年間に柿葺入母家造りで再建、明治 9 年瓦葺・切妻に改めました。



実相寺方丈

国登録文化財の実相寺庫裡

創建当時の庫裡は方丈同様織田信長五千騎の兵により焼失しました。現存する庫裡は元禄年間に再建されたものです。

昭和 19 年 12 月の東南海地震 20 年 1 月の三河地震では、本堂、庫裡を始め、講堂に甚大な被害を受け、更に昭和 34 年の伊勢湾台風の被害も壊滅的でした。



実相寺の庫裡

実相寺庫裡の裏庭

現在の裏庭は地震、台風の被害を受ける前は、この地には客殿等の諸堂があり、庭としての景観は別の場所でしたが、裏庭はその後改修され、裏庭としての景観は徐々に蘇生されつつあります。



新緑紅葉時の裏庭

方丈での子供座禅

実相寺には、三河地震以前には文殊堂（座禅堂）もあり、修行僧が修行しておりました。

実相寺送検当時には、この地に京都禅文化の華が咲き、多くの禅僧が集い、大いに栄えたと伝えられています。



真剣に取り組む座禅風景

知多岡田簡易郵便局舎

所在地：知多市岡田字中谷 8
所有者：伊井基治
建築年：明治 35（1902）年
登録年：平成 25（2013）年

知多岡田簡易郵便局の歴史

明治 32 年に伊井又兵衛が、岡田字中谷 8-1 の自宅で、「岡田郵便受取所」として開局します。明治 35 年に同人が中谷 8 に「岡田電信郵便局」を建設し、今も建物はそのまま現存しています。

昭和 41 年までは「岡田郵便局」や「知多郵便局」に名称変更したり、局長交替をしながら郵便局は、継続されました。しかし郵便物等の量が増え、局員もそれに伴い増えて、狭くなり別の地へ移転しました。42 年以降は、家具販売店や、八百屋の倉庫になりました。

その後空き家になったため、平成の始めに土台や、軒先が腐りだし、解体しようしました。しかし周辺の篤志家が、支援するから残してほしいと依頼があり、平成 5 年に修復工事をして、「知多岡田簡易郵便局」として、再開されました。同時に「岡田街並保存会」が結成され、会員 30 人で発足しました。事務局は、郵便局舎内におかれしました。平成 25 年に国の登録有形文化財として知多市で初めての登録がされました。



彼岸花咲く「知多岡田簡易郵便局」舎

郵便マーク入りの鬼瓦

郵便局舎には、棟や玄関の鬼瓦に逓信省のマークである「テ」が入っています。局舎では、珍しいものだと思います。7つの内、6つぐらいは屋根にのっています。



郵便マーク入り鬼瓦

知多岡田のまち

岡田は、江戸時代から各家で木綿の生産が盛んでした。江戸幕府の鑑札を受けて広く販売ができる問屋さんが、2軒もありました。明治時代中期には、動力織機が導入され大量生産の時代に入りました。近在の町から大勢の女工さんが働きにみえました。故郷への仕送りや、生活用品の小包みの授受、急を知らせる電報に郵便局が使われました。木綿会社は、販売や仕入れ代金の授受に為替を利用したりしました。町は、木綿景気で栄えました。



郵便局周辺の街並風景

名古屋陶磁器会館

所在地：名古屋市東区徳川一丁目10番3号
所有者：一般財団法人名古屋陶磁器会館
建築年：昭和7（1932）年
登録年：平成20（2008）年

立地「文化のみち」について

名古屋陶磁器会は、名古屋城から徳川園までの歴史的建造物が多く残る「文化のみち」の中にあります。

この地域は、江戸時代には中・下級武士の屋敷が連なり、明治から昭和初期には近代産業の担い手である起業家、宗教家、ジャーナリストなど様々な人が去来し、交流する舞台でした。現在はこの歴史性と建築様式が市民に親しまれ、名古屋の観光拠点の一つとなっています。

歴史について

建物の竣工は、昭和7年で名古屋陶磁器貿易商工同業組合の事務所として建設されました。同組合は明治42年に設立され、大手・中小の絵付け加工業・貿易商など多くの業者が組合員でした。昭和3年10月の組合総会で、第4代組合長の井元為三郎が昭和天皇御大典記念として事務所新築を發議しました。

名古屋の輸出陶磁器産業の歴史は、明治10年代、神戸、横浜などの貿易商からの要望に応じて、瀬戸、美濃から仕入れた素地に上絵付けを施し、日用食器として輸出し始め、明治20年後半、輸出量の飛躍的な増加とともに、広い生産拠点を必要とした陶磁器業者は、東区に集中していた武家屋敷跡地を安価に入手し工場を構えるようになりました。当時の主要船積み港である四日市港と水路でつながる堀川などの好立地を背景に大正から昭和にかけて、名古屋は名実ともに輸出陶磁器の最大生産地となりました。

建物は、建築面積381平米、延床面積914平米、鉄筋コンクリート造3階建て、昭和21（1946）年に鉄骨造の建屋が3階に増築されています。



なごや陶磁器会館 外観

現在の建物利用状況について

現在は、1階を会館の事務所と展示室、一部を貸事務所とし、2階の大ホールではイベントに使用し、2階の他の部屋と3階は貸事務所とし、家賃収入で運営をしています。

建物の特徴は、1階の大きな半円窓、軒下の装飾帯、楡引スクラッチタイル張り、全体が彫塑的造形で、表現主義的建築と言われています。その他、玄関入口のステンドグラスや廊下のモザイクタイル、サッシ等劣化しながら残っています。

2階の大ホールについて

近年11月3日には「歩こう！文化のみち」のタイトルで施設訪問のスタンプラリーを行っています。愛知登文会の会員である、愛知県庁本庁舎、名古屋市役所庁舎、旧川上貞奴邸、カトリック主税町教会信徒会館、金城学院栄光館、建中寺徳興殿、名古屋陶磁器会館はこの「歩こう！文化のみち」の中にあり、この日に特別一般公開を行います。



2階の大ホール

この写真は当館 2 階の大ホールです。昨年の文化の日にはコンサートとカフェを開き、ランチやケーキを沢山ののお客様に楽しんでいただきました。このホールでは、「転写紙貼り体験教室」、「こども卓育教室」、「こども文化財体験教室」(愛知登文会主催)、「ヘリテージマネージャー養成講座」(愛知建築士会主催)なども開催しました。

平成 23 年 3 月には映画「ALWAYS 三丁目の夕日'64」の撮影が行われました。

展示室について

会館 1 階には過去に輸出された陶磁器の展示室があり無料で見学できます。

当館の展示室の特徴は、近代産業としての「名古屋絵付け」を代表する「デコ盛り」技法による竜、羅漢、百老の図柄を彩色した花瓶等のほか、卵の殻ほど薄い生地に芸者透かしが付いた碗皿、お酒を入れお酌をする際、鶯の鳴き声が出る「鶯とっくり」等ユニークな展示品が多くあります。販売コーナーも有ります。百聞は一見に如かず、是非、建物と同時に展示品もご覧ください。

企画展について

毎年 12 月にはクリスマスイルミネーションを点灯し、ポインセチア柄などクリスマス関連の食器やサンタクロースの置物などを 300 点ほど展示します。

毎年、多くのファンの見学者がドイツのクリスマスマーケット風のムードを楽しみにお越しいただいています。皆様も是非お越しください。



展示室入口のクリスマスイルミネーション

小栗家住宅

所在地：半田市中村町 1-18
所有者：個人
建築年：主屋：明治 3 年（1870）／表門：明治前期／辰巳蔵：明治前期／書院：明治前期
／茶室：明治前期／渡り廊下：明治前期／北座敷：明治前期／離れ：大正 4 年（1915）
登録年：平成 16（2004）年

小栗家住宅鳥瞰写真



明治 3 年建築。棟梁は小栗善七。平成 16 年 3 月に、国土の歴史的景観に寄与し、造形の模範となっている建造物として、主屋、書院、辰巳蔵、茶室、渡り廊下、表門、北座敷、離れの 8 件が半田市初めての国登録有形文化財として登録されました。

明治 23 年第一回陸海軍合同演習が半田で実施された際、有栖川宮熾仁参謀総長らの宿舎として小栗家住宅書院が利用されました。

小栗家の活用

小栗家では、文化財を活用したまちづくりに積極的に協力をしています。

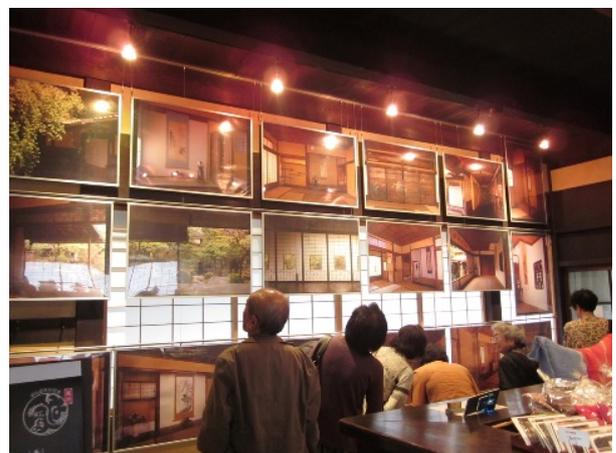
平成 18 年からは、道路に面した「店」部分を利用して半田市観光協会により観光案内所として活用しており、連日多くの観光客が訪れています。



観光案内所は「蔵のまちギャラリー」としても活用されています。



また、「店」以外の小栗家住宅内部は一般には非公開で、ギャラリー内にて写真パネルでその様子を紹介しています。



茶の湯体験

平成 16 年度から半田小学校 6 年生を対象に、文化財体験特別授業を実施しています。この際、専門家による文化財理解のための特別授業に加え、大学生のガイドによる住宅見学、さらに座敷を利用して茶の湯体験を行っています。

これまでに、のべ 1,000 人を超える子供たちが参加しています。



こども文化財体験事業

平成 24 年には、愛知登文会によるこども文化財体験事業を実施し、小栗家住宅の見学の他、土間にて餅つき、大福作り体験をしました。



博物館明治村

西園寺公望別邸「坐漁荘」

所在地：犬山市字内山一番地
所有者：公益財団法人 明治村
建築年：大正 9（1920）年
登録年：平成 15（2003）年

博物館明治村は来年平成 27 年(2015)3 月 18 日に、開館 50 周年を迎えることになります。50 周年という大きな節目を迎えることに先立ち、この度、平成 24 年 5 月より、西園寺公望別邸「坐漁荘」の修理工事を約 2 年間に亘り実施し、本年 4 月 22 日に無事リニューアルオープンを迎えることができました。

写真 1 は修理後の坐漁荘の西側の全景です。今回の修理工事では、屋根瓦及び銅板庇ノの全面葺き替えを実施し、装いを新たにしております。



写真 1 西側外観全景

写真 2 は修理後の坐漁荘の東側の全景です。外壁の杉皮、竹が新たになり、建物の外観が引き締まりました。



写真 2 東側外観全景

今回の修理工事における大きなトピックスとして、解体時に残されたサンプルをもとにして行った三種類の襖表紙の復原が挙げられます。これら三種類の襖紙はそれぞれ、現在は製造技法が途絶えてしまっているものがほとんどであり、作業は手探りの状態でした。以下の 3 枚の写真に復原した襖紙を簡単に紹介いたします。

まず写真 3 の揉唐紙ですが、これは胡粉等の顔料を地の紙一面に塗り、紙を揉むことによって揉跡部分のみ顔料が落され地色が表されます。この揉跡を景色とした唐紙です。

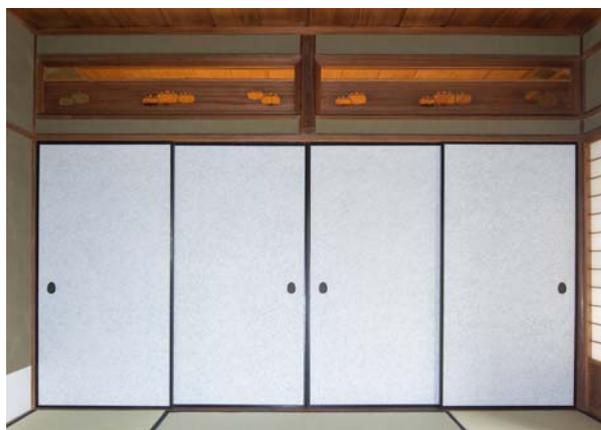


写真 3 一階次の間より御居間をみる

写真 4 は丁子引です。これは、柿渋により横縞が線引きされた唐紙です。揉紙も丁子引も和本の表紙や軸装、紙箱などにみられますが、三尺×六尺の大判の紙を作製するには高度な技術を要し、復原には幾度となく試行錯誤を要しました。

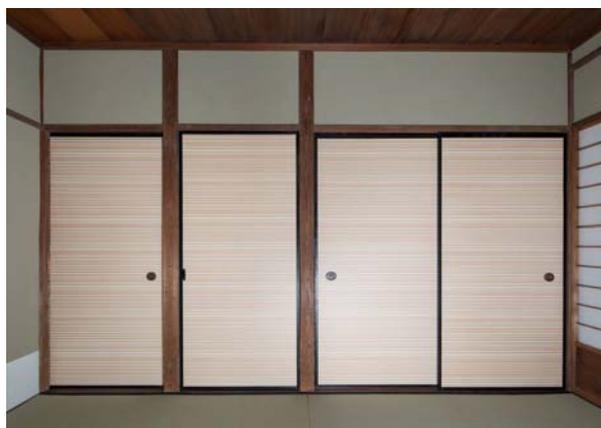


写真 4 一階女中室六帖西側を見る

最後の雲華紙ですが、これは元来、明治 42 年（1909）、岩野平三郎により特許申請された手漉の表紙がもととなっているもので、現在は機械漉の紙が流通しておりますが、手漉のものは、その製法が全く途絶えてしまっていた紙です。手漉雲華紙は、現在の機械漉きのものよりもずっと雲を散らしており、ずっと表情豊かな紙です。今回の復原において、解体時に残されたサンプルと明治期の特許明細書などを元に技法解明に挑戦し、幾度か試作を経て復原を行うことが出来ました。

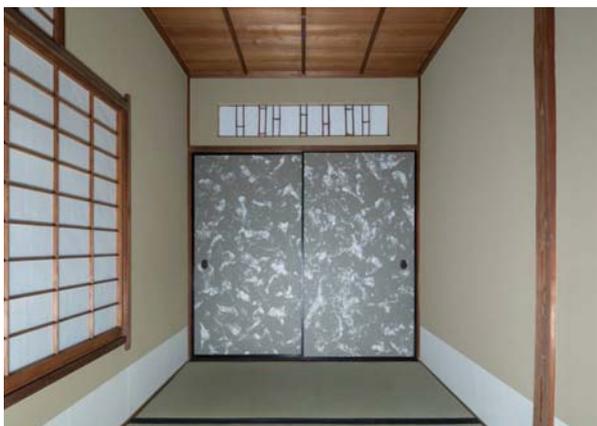


写真 4 一階畳廊下五帖北側を見る

今回の修理工事は、色々な意味で挑戦することの連続でした。襖紙を復原することによって、往時の設えを蘇らせることが可能となり、このことによって、建物の価値をまたより一つ高めることができたのではないかと考えております。今後も、当館にお越しいただける来館者に、修理工事を通じて得られたことをお伝えし、坐漁荘の新たな魅力を感じ取っていただきたくことができれば幸いです。

大野宿鳳来館

所在地：新城市大野字上野 17-2
所有者：株式会社スエヒロ産業
建築年：本館 大正 14（1925）年
土蔵 明治中期
登録年：平成 21（2009）年

外見はヨロイ！ 入ればロマン！

大野宿は江戸時代から「商都」と言われ、流通や商・工業で地域経済の中心でした。その一翼を大野銀行が担って共に発展し、多くの支店を統括する本店が大正 14 年に誕生。



鉄筋コンクリートの内部は木造 2 階建

おいしいコーヒーは“通”好み

ちょっとイカメしい玄関に一步足を踏み入れると、目に飛び込む 3 本の丸柱。カウンター越しに迎えるは可愛い笑顔の昭和娘。ここはゆったりとした時間の流れる素敵なテールームです。



室内の各所に銀行の“なごり”

お気に入りのコレクションやグループの作品を展示しませんか

支店を束ねる事務室であった 2 階のフロアは、見事な左官の“技”による漆喰の飾り天井と外光たっぷりの多目的ルームに大変身！コンサートやディナー、イベント会場にと皆さんの企画をお待ちしています。

別室にはオーナーのコレクションや“遊書”作品もさりげなくお出迎え。



2 階多目的ホール(左)、2 階への木造階段も雰囲気たっぷり(右)

タイムスリップすればそこは明治

この地にあった初代大野銀行は商家でした。本店建替えにも壊さず残った土蔵は保存庫として活用されてきました。文化財に登録された機会に鳳来館所蔵の“お宝”庫としてリニューアルされ、来訪者が自由に鑑賞できる展示館になりました。火災に耐える“和”の大工仕事にも注目！



“蔵”越しの景観もお見逃しなく

これぞ！三河大工の職人技なり！

「商都」大野は石材（硯、砥石）林材、農（蚕）産物の商談がさかんに飛びかい、成立の祝宴には綺麗どころが入って手打ち会が賑やかに開かれたといひます。そんな雰囲気を思い起させる粋な2階家屋が現れました。その名も“待合 菊水亭”その部屋で自分だけの時間を独占しよう。



外壁には“コテ絵の奴さん”必見

こどもガイドにお客さんも大喜び

堅いイメージの「文化財」を訪れた方に親しく体験、鑑賞頂くにはどのように案内したり、印象に残る企画を発信したらいいか。地域の住民に気安く利用していただくイベントは何があるか。他方面からのリクエスト募集中！



銀行の“記憶”をガイドする小学生

柴田家住宅主屋

所在地：愛知県清須市西枇杷島町辰新田 6 5
所有者：柴田正康
建築年：明治 29 (1896) 年
登録年：平成 18 (2006) 年

110年振りに半解体建直し修理

平成 17(2005)年 5 月再生（半解体・建直し）に着手、平成 19(2007)年着工、平成 20(2008)年竣工。できるだけ旧に復した。



再生前

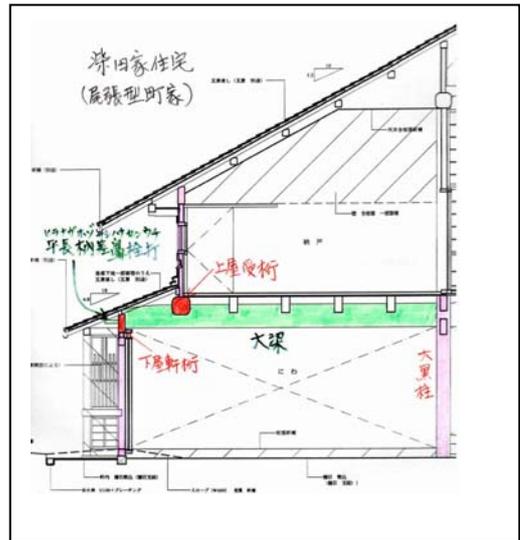


再生後（明治建築だが、江戸期の厨子 2 階）

尾張型町家（柴田家住宅の特徴）

美濃路沿いの町家は、店部分に広い「無柱空間」を確保する為、屋根の重みを 1 階天井に見える隔柱間の「上屋受桁」で受け、大黒柱と正面下屋軒桁間に「大梁」を渡し、この大梁に架けて、いわゆる「十字梁」とする尾張地方でよく見られる特徴的な架構になっている。

大梁の先端が「平長柄差鼻栓打（ひらながほぞさしはなせんうち）」で、軒桁から前面に飛び出しているのが、外観からも判る特徴。



尾張型町家断面図



断面図の現況

野風炉披露（尾張型町家の広い前面土間を利用）

今は無き東照宮祭を正統に受け継ぐ尾張西枇杷島祭が 6 月第 1 土、日に催される。その証が野風炉である。山車総代は供廻りに必ず野風炉荷いを召連れ、旦那衆は休憩時に野風炉で野点を嗜む。名古屋型山車には必ず附属していたであろう野風炉も今や西枇杷島祭にしか残っていない。東六軒町が長らく途絶えていた野風炉復元を企て、土間のある拙宅を会場に平成 23 年復活させた。



岡崎信用金庫資料館

所在地：岡崎市伝馬通 1-58
所有者：岡崎信用金庫
建築年：大正 6（1917）年
 昭和 25、34、57 年改修
登録年：平成 20（2008）年

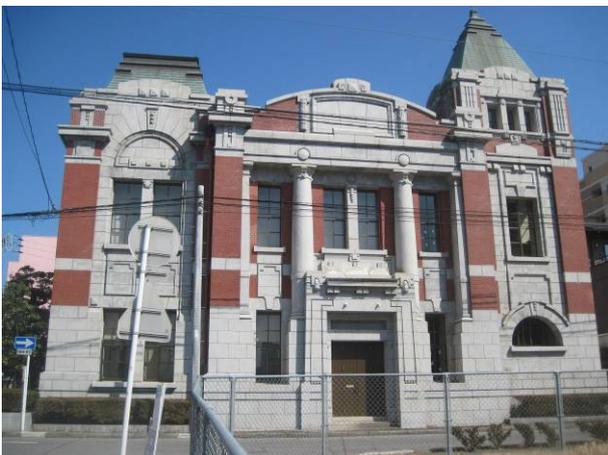
岡崎信用金庫資料館

ふるさと岡崎の発展と文化向上のお役に立ちたいと願って昭和 57 年に開館しました。特に赤レンガと地元御影石を組合わせた特色ある建物は、本格的なルネッサンス様式を取り入れた建築で、大正 6 年に旧岡崎銀行本店として建造されたものです。



岡崎信用金庫資料館

日本近代建築の重鎮・鈴木禎次氏的设计によるもので、全国でも有数の貴重な建物として、その保存管理に大きな期待が寄せられています。平成 20 年 3 月に国の登録有形文化財として登録されました。



市民ギャラリー

地域文化の向上に貢献する為、サークルやグループ等にギャラリースペースを展示会場として開放し、発表の場を提供している。



貨幣展示室

「日本の貨幣」「世界の貨幣」を常設展示している。パネルや映像等による「貨幣の偽造防止技術」の紹介

<体験コーナー>

- ・1億円を持ち上げてみよう。
- ・千両箱を持ち上げてみよう。



寛家住宅

所在地：名古屋市中村区下米野町 3-29
所有者：寛 清澄
建築年：明治元年移築 建築は江戸後期
登録年：平成 25（2013）年

主屋

寛家住宅主屋は江戸中期に確立された鳥居建てと呼ばれる構造体を持つ建物で、江戸後期の建物と考えられ、当時の構造体が良い状態で保存されています。

また、建物は明治元年に現在の場所に移築され、移築後約150年が経過しています。



寛家全景

小屋

ツシ2階建ての建物で明治24年9月に増築され、翌10月の濃尾地震を被災しました。写真はその時に出来た地割れ跡で現在も床下に残っています。

現在小屋は寛建築設計の事務所として使用され、代表の寛清澄は「なごや歴まちびと」として古民家の保存活用に取り組んでいます。



濃尾地震の地割れ跡

設え

夏は葦戸と簀戸に簾むしろ、冬は板戸、襖、障子へと建具が入れ替えられ、昔ながらの季節に合わせた暮らしが現在でも受け継がれています。



設え準備中

こども能楽教室

現在寛家住宅では先代の能楽師であった寛鉦一のはじめたこども能楽教室が行われ、次世代に能の文化を伝える活動をしています。

また、残された能に関する記録や資料を保存活用するため、東海能楽伝承会が公開に向けて資料整理を進めています。



愛知登文会「こども文化財体験講座」の様子

小島家住宅

「忍冬酒本舗 残月の間特別公開」

所在地：犬山市犬山東古券 633
所有者：個人
建築年：弘化 4(1847)年
登録年：平成 17 (2005) 年

忍冬酒

忍冬酒本舗は、犬山市本町通の一筋東側の通り練屋町通りに所在し、犬山城の東側余坂村の北側に位置する小島の庄の在郷武士であったが、慶長 2 年(1597)武士を止め、現在地で朝鮮伝来の「忍冬酒」の醸造を始めた。忍冬酒本舗は古くから文人墨客が訪れていた。

小島家は古くからの犬山の有力町人 11 人衆の一人で、「惣町年寄・惣町代」を寛文・享保年間に勤めた家柄で「苗字帯刀被御免」「忍冬酒御用に付、諸役本宅分御免」の特権が与えられていた。忍冬酒は犬山城主成瀬家の将軍献上酒となっていた。忍冬酒の製法は一子相伝の秘法で、現在まで続いている。



小島家住宅外観

「残月の間」特別公開 (5/3~5/6)

「残月の間」は「座敷」と呼ばれている書院造りの建物の一番奥(南西隅)に所在する。

この座敷棟は弘化 4 年(1847)に建築されたことが棟札により分かっており、残月の間は表千家「残月亭」の写しである。

小島家は現在も住宅として使用されており、非公開の建物であるが、NPO 法人犬山城下町を守る会の働きかけにより、5/3~5/6 の 4 日間、残月の間を特別公開した。公開時間は 10 時~16 時。保存協力金 300 円。

4 日間で 220 名の来訪者があり、残月の間で煎茶を接待し、建物解説を行った。



特別公開の様子



庭園